道徳実践の金言500編を収録
改訂『廣池千九郎語録』
モラロジー研究所・編
本体1,500円＋税
お求めは
巻末ハガキか
QR（オンラインショップ）から

未来世代に贈る徳のある生き方

廣池千九郎エピソード 善を積みて徳を子孫に遺す

限りある命を自覚する

私たち人間の命には、必ず終わりがあります。人生が有限であることを考えるきっかけは、自分が病気になったり、身近な人を亡くされたりと、人によってさまざまでしょう。また、医療技術が発達した時代であるとはいえ、年齢を重ねていけば、有限な肉体・生命について自覚するのは、当然といえます。

限りある命を自覚したとき、人は何を考え、どのように行動するでしょうか。人生の最後にぱーっと好きなことをして散財する人もいますし、何歳になっても教養を深め、得た知恵を人のために役立てる人もいます。周りの人に迷惑をかけないように、身辺の整理（終活）を始める人もいるでしょう。そうした中で、人生の意味とは、また自分の役割とはなんなのか、あらためて問うことがあるかもしれません。

自分の命が尽きた後も、子孫の生活や世の中は続きます。では、自分のいない未来を生きる人たちに向けて何を遺せるのか。また、そのために、どのような生き方ができるのでしょうか。

後世への最大遺物

明治から昭和初期にかけて活躍した思想家である内村鑑三（一八六一～一九三〇）は、『後世への最大遺物』という書物を遺していますが、そこでは、後世に遺せるものについて熱く語られています。

まず、「金」「事業」「思想（文学）」などが候補として挙げられますが、これらを遺すには、ある種の才能や努力が必要で、すべての人が実践できるものではありません。そこで、内村は次のように述べています。

「それならば最大遺物とは何であるか。私が考えてみますに人間が後世に遺すことのできる、そうしてこれは誰にも遺すことのできるところの遺物で、利益ばかりあって、害のない遺物がある。それは何であるかならば『勇ましい高尚なる生涯』であると思います」

では、「勇ましい高尚なる生涯」というのはいったいどのような生涯でしょうか。内村は続けて、「失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中でなくして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈物としてこの世を去るということであります」と述べています。

これは、昨今の不安定な世の中にあって、私たちに勇気を与えてくれる力強い言葉です。どんな困難や苦悩にも負けず、力強く生きてきた人生の先輩たちが、希望を持って生きている姿を見せることで、次世代も自信を持って、安心して人生を歩んでいけるのではないでしょうか。

後世に伝える徳の力

総合人間学モラロジーの創建者である廣池千九郎（一八六六～一九三八）もまた、後世に伝えるべき考え方や生き方を、遺しています。

廣池は、「家や屋敷や地所や財産や書物などを遺す父母もしくは祖先は世にたくさんあれど、善を積みて徳を子孫に遺す父母もしくは祖先ははなはだ少ないのであります」（改訂『廣池千九郎語録』モラロジー研究所、三頁）と述べ、多くの人が目に見える物だけを子孫に遺すことに一生懸命に努力していると指摘しています。

その上で、「子孫に金を残すよりも子孫に良い教育をするということが、一番自分と子孫とのための利益になるのである。（中略）いくら金があっても、品性の劣悪な子供であってはなんの役にも立たない」（同）と述べています。

廣池も内村鑑三と同じように金や物ではなく、「徳」や「良い教育」を子孫に遺すことが誰にとっても利益になると教えました。モラロジーでは、「徳」を学力や知力、金力、権力などの力を支える根源的な土台と捉えます。いくら能力が高くても、その力を不道徳的に利用すれば、仮に一時の成功が得られても、幸福は長くは続かないものなのです。

「良い教育をする」とは、すべての力をいかす徳が人生の土台であることを自覚し、自らの生き方として示すことで、次世代に道徳的な感化を与え続けることなのです。このような生き方は、自分の子供や孫、人生の後輩たちに伝わります。

皆さんは、どのような生き方を未来へ贈り届けますか。

（本誌）